

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

<卒業論文> 『暗夜行路』と不在の祖母

著者	菊井 みわ
雑誌名	日本文学誌要
巻	66
ページ	53-61
発行年	2002-07-13
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020225

『暗夜行路』と不在の祖母

志賀直哉の唯一の長編小説であり、日本近代文学の代表作とも呼べる『暗夜行路』が完成するまでに要した月日は、実に二十五年。『暗夜行路』の前身『時任謙作』の執筆を始めたのが大正元年。後に『暗夜行路』前編の終章となった『憐れな男』を発表したのは大正八年、序詞となった『謙作の追憶』を発表したのは大正九年。そしていよいよ『暗夜行路』の連載を始めたのがその翌年の一月からである。完成までに要した月日は勿論だが、夥しい量の草稿を書き溜めていたにもかかわらず、連載を始めるまでに十年もの月日を要したのには一体どんな理由があったのだろうか。

作者はその理由を、『暗夜行路』の前身『時任謙作』は長年の父との不和を材料としたもので、私情を超越する事の困難が、もしかしたら、書けなかった原因であったかもしれない（『続創作余談』）と説明している。だが、本当にそれだけだろうか。私は甘えの推移という観点からこの作品を読み進め、新たな理由の仮説を立ててみた。作者の祖母が生きていた為に、書き始

める事が出来なかったのではないだろうかという、少々大胆な仮説である。

志賀作品で「祖母」と言えば、当然父方の祖母留女を指す。この祖母が作者にとってどれ程大きな存在であったかは言うまでもない。彼女が果たしている役割が主人公（作者）の甘える対象である事は、『大津順吉』を始めとした三部作や、祖母が主題の短編を読めばすぐにわかる。「甘える」と言っても、志賀の甘え方はかわいがって貰いたくて纏わりついたりする甘え方ではない。相手の好意に寄り掛かって自分本意の振る舞いをする甘え方だ。志賀にとって祖母は唯一安心して残忍を働ける相手なのである。その祖母が、集大成とも言える『暗夜行路』にメインキャストとして登場して来ないのは余りにも意外な事だった。だからこそ、誰が主人公を甘えさせてくれる役割を果たしているのかに着目したのだ。

時任謙作の甘える対象は数多い。母から愛子の母、お栄から直子へと移り変わる。まるで自分だけを甘えさせてくれる「誰

菊井 みわ

か」を探し求めるかのように。『暗夜行路』以外の作品ならば、この「誰か」は祖母一人である。その祖母がいないという事は、謙作は祖母に甘えられない訳である。このような状況を作り出したのには、祖母の死期が迫っていた事が大きく関わっていると思う。何故なら、志賀は祖母の死を酷く恐れていた。父との和解を試みようと思ったのも、祖母の衰弱が大きな原因であった事を『和解』の中で告白している。実際、前編の連載を始めた年の八月に祖母を亡くしている。志賀にとって祖母を亡くするという事は、絶対的な甘える対象を無くすという事だったに違いない。だからと言って、いつまでも祖母に甘える事など出来る訳がない。その為に祖母を敢えて登場させず、『暗夜行路』を通して祖母断ちを実現させたのではないだろうか。つまり、仮説をもう少しわかりやすく言うと、祖母が死んでしまうかもしれないという恐怖が志賀に『暗夜行路』を書かせたのではないだろうかという事になる。

この仮説を証明するには、作者が祖母に求めたものと、時任謙作が女性に求めたものが同じ甘えである事を明らかにしなければならぬ。だがそれ以前に、「時任謙作を作者自身であると思う人があり、批評でもそういう見方で批評したものもあるが、何処まで作者自身で何処からそれを出た人物かを説明するのは困難だ」（『創作余談』）と本人が述べている以上、謙作を作者自身と見なして話を進める訳には行かない。

そこで、謙作は境遇のみ架空の三十歳前後の作者自身という考えを前提として話を進める事にする。これは謙作の性格、性質、体質等が、作者自身が主人公である『大津順吉』を始めと

した多くの作品の主人公と全く同じである為。また、謙作の結婚観や物事の考え方、美術品の好み等は昔の作者の価値観が後に変化したものと思われるからである。なお、「甘え」については精神科医土居健郎の著書から多くの資料を得たので、これを取り入れながら進めて行く事にする。

話を元に戻して、謙作が女性に求めたものを辿って行く事にする。まず、謙作は普通の子供がそうするように母に甘えを求めるが、母は決して謙作を甘えさせなかった。謙作は祖父と母の過失によって生まれた子供であり、そういった立場上、母は謙作を十分に甘えさせられなかったのだろう。夫の前で夫以外の子供を甘やかすという事は、自分の過失を全て許してくれた夫の傷を再び暴く事になるからだ。

幼い頃に母に甘えさせて貰えなかった謙作が、求めるものは甘え以外の何物でもない。まず始めに、自分を甘えさせてくれる相手に選んだのは謙作の母方の祖父母の養子であり、母と幼なじみで特に親しかった愛子の母である。謙作が愛子をそれ程愛していないのにも関わらず結婚のプロポーズをしたのは、意識の深層では愛子の母に甘えたかったからだと思う。何故かと言うと、プロポーズを断られた時の衝撃を「只一番応えたのは愛子の母の気持ちであった」と表現しているからだ。愛子に対しては「仕方がない」の一言で済ませられるのに、愛子の母に対してはまるで裏切られたかのような気持ちになっている。この気持ちの相違は、謙作が愛子との結婚に求めていたものが、やはり愛子の母に甘えさせて貰う事だったからだろう。

続いて、長い間祖父の妾であった殆ど二十も年の違うお栄を

甘える対象として結婚を申し込む。元々、謙作がお栄に対して取っていた行動は、普通子供が自分の親に対して振る舞う行動に近い。「二タ晩家を明けたという事で何となく彼はお栄と顔を合わすのが具合悪かった」というのがそれである。誰でも夜遅くまで遊んで帰ると、何となく決まりが悪いものだろう。これは、自分の帰りを待っていてくれる人に対して、早く帰らなかった事を申し訳ないと思う気持ちから来るものだ。謙作の場合も同じ気持ちだろう。それから、「謙作はお栄がうるさく思うだろうと自分でも思える程、見る物、見る物に説明したくなって弱った」というのもそうだ。子供は自分がどれ程物知りであるかを親にわかってもらう為、自分の知識を必死で伝えようとする。謙作の行動はこれに良く似ている。謙作は自分でも子供らしい気持ちだと思いつながら、お栄が相手だと自然臆面なく子供らしさが出てしまうのである。

しかし、彼は決して心からお栄に甘える事が出来た訳ではない。本当は愛子との結婚が思うように進まずにいた時、お栄に甘えなかったのだ。それを妨げたのは、お栄が自分の肉親ではないという事実である。もしも、お栄が肉親であったなら、その懷に抱かれるような気持ちで甘える事が出来たかもしれない。それでも謙作にとってお栄は今まで一番甘えて来た女性であり、肉親ではないが気持ちの上では殆ど肉親の近さにいると思っただけという事は、謙作がお栄を結婚相手に選んだのは、愛子の時と同じ様にお栄という一人の女性に惹かれたからではなく、お栄と結婚する事で今まで邪魔になっていた「肉親ではない」という一線を越えて、本当に甘える事が出来るようになる

るからという気がするのだ。

だが、「甘えは相手次第という所があります。こちらは甘えたい、しかし向こうが甘えさせてくれればいいけれども、甘えさせてくれなければフラストレーションが起きる」(『甘え』さまざま『土居健郎・弘文堂・平成元年』)という言葉通り、愛子の母にもお栄にも甘えさせて貰えなかった謙作はフラストレーションを起こしている。自分から放蕩を始めたのも、お栄に対して妙な想像を抱いたのもその現れだろう。「淫蕩な気持ち、これを本当につつしまなければならぬ」と固く決意したにもかかわらず、すぐにまた廓へ足を運んでいる。頭では理解していても、フラストレーションを押さえきれなかったのだろう。その廓の遊女の乳房を、「豊年だ！豊年だ！」と表現しているのが非常に興味深い。女性の乳房は甘えの根源である。謙作は乳房を何か値打ちのある物、自分の空虚を満たしてくれる何かしら唯一の貴重な物、その象徴と感じている。この事は、彼が求めているものがやはり甘え以外の何物でもない事を示しているのだ。

満たされない甘えの衝動から漸く立ち直りかけたのが、後編の最初である。謙作は初めて直子を見た時に、「普段何気なく美しい人を見る時とは、もつと深い何かで惹きつけられ、彼の胸は波立った」と感じている。この感じを抱いたのには、二つの要素があると思う。まず一つ目は、謙作が自分を病人と認識していた事。もう一つは、直子を目撃した時彼女が病人の世話をしていたという事だ。この二つの事から、直子が自分の病気も世話してくれる様な女性かもしれないと思ったのではないだ

ろうか。謙作が惹きつけられた「何か」とは、直子の中にある甘えの提供者としての存在であり、甘えに飢えている謙作は直感でそれを感じ取ったのかもしれない。

こうして漸く謙作は十分に甘える事が出来る女性と巡り会えた訳だ。ただ、ここで一寸意外なのは、謙作が直子に甘えていたという印象を余り受けない事だ。結婚話は自然に消滅してしまつたものの、今まで通りの関係を保つて来たお栄が天津に行つてしまつたのだから、謙作が直子にべつたり甘えたとしても不思議ではない。

ところが、謙作と直子の関係はどちらかと言えば対等だ。それ所か、謙作の満たされなかつた甘えはいつの間にか満たされている。土居健郎の説によると、甘えの語源は母子未分化の状態にある乳児が母親を求めるといふ事で、人が甘える事で求めるものは相手との一体感という事になる。だとすると、「痛切に直子が完全に自分の一部である事を感じた」という場面は、謙作が心から甘えを満たされているといふ事になる。

これは余りにも急過ぎる展開だ。甘えてもいないのに甘えが満たされているのでは、辻褄が合わない。この矛盾は甘えの推移という観点から見ると、この作品の欠点として映つてしまう所なのかもしれない。

話を元に戻すと、謙作は直子との結婚によって初めて甘えを満たされた事になる。だが、「甘えは相手がこちらの意図を理解し、それを受け入れてくれる事が絶対条件である。しかしこの事はいつも可能という訳にはいかないから、甘えを求める者はいきおいフラストレーションを経験する事が多く、もし満足

を感ずる場合にも長続きしないのが通常である」(『甘え』の構造(新装版)』土居健郎・弘文堂・平成十三年)という言葉通り、謙作の満たされた甘えはそう長くは続かないのである。

まず最初に彼の安定した精神状態を乱すのは、初めての子供の死である。この経験は、一見謙作を成長させるかのように思わせる。今まで必ず誰かに甘えていた謙作が、甘えさせる立場に変わる為に起こる成長である。自分の子供の死という危機に晒されて、初めて誰かの世話をする立場へと逆転するのだ。もしこの時子供が助かっていたら、謙作は甘えさせる事が出来る人間になれたかもしれない。

しかし結局子供は助からず、直子との間にも溝が出来て行く。謙作には直子の「それ(泣き言を言う事)がいやなの。貴方にならいいけど、実家の者にもそれは云いたくないの」という言葉の意味がわからない。直子は他の誰でもなく、夫である謙作に甘えたいのである。だが、今まで誰も甘えさせた事のない謙作が、直子の意図を理解し、それを受け入れる事など不可能に近いといつても過言ではない。

そして、二人の関係が完全に崩壊してしまうのが直子と要の姦通である。この姦通は、表面上は直子が要の設えた罠に嵌まつてしまつたかのように書かれている。しかし要の行為を防ぐうと思えば直子には防ぐ機会があつたのだ。例え謙作の留守中に要が訪ねて来た事が偶然だったとしても、いくら従兄とはいえ、一人の男を女二人きりの家に泊める事は妻として不都合だからと言って、泊まらせない事も出来た筈だ。二階に二人きりという状態で要の肩を揉むという行動も、一寸考えれば不用心

である事にすぐ気がついただろう。

不用心であるという事は、二人の間に気兼ねがないという事でもある。そんな二人の関係だからこそ、要は直子の行為に寄り掛かって謙作の留守中に上がり込んだのだ。そして直子も要の自分本位の行動を許している。つまり、要は直子に甘えていたし、直子は要を甘えさせていた。謙作が直子を許せないのは、直子が要に犯されてしまったという事実は勿論だが、それよりも直子が要を甘えさせている事なのではないだろうか。

以上見て来たように、謙作が女性に求めたものは自分を甘えさせてくれる役割以外の何物でもない事がわかっただろう。これは正に、作者が長年当たり前のように祖母に求め続けたものと同じなのだ。従って、作者は『暗夜行路』の中で祖母の代わりを探し求めていると言う事が出来るだろう。

そして、謙作が甘えを求めるきっかけとなった「甘えさせてくれない母」は「今後甘えられなくなる祖母」を表しているのだと思われる。何故このように捉えたかと言うと、謙作の数少ない母の思い出は、作者の実際経験では祖母の思い出であったというからだ。『志賀直哉全集第六卷』（岩波書店・昭和四十八年）の草稿の中では、屋根に登った作者を叱ったのも、羊羹を口に押し込んだのも母ではなく祖母なのである。本来作者にとって祖母の記憶であるものが、謙作の母の記憶として書かれているという事は、この母は実は無意識の内に作者にとって祖母に当たる人物として書かれていたのではないだろうか。

他にも、謙作の母は作者の祖母が元となっている事を匂わせる要素がある。「何といつても自分には母だけだった」という

言葉は、「何といつても、もう祖母だけだ（『祖母の為に』）」という言葉に非常によく似ている。前者は謙作が自分の出生の秘密を知らされ、誰も彼もが自分から遠のいてしまうような孤独を感じた時の言葉。後者は作者が総ての友達が自分に敵意を持っていると思ひ込み、耐えられない孤独と腹立たしさを感じた時の決まり文句だ。

志賀は同じような気持ちの時に、同じような表現を使う。その代表が「この座敷だけが熱にうかされ、其処には「凶」という眼に見えぬ小さなものが無数に跳躍しているように謙作には感じられるのだ」という表現だ。これは『暗夜行路』の中で、謙作が直子に自分の留守中に何があったのかを問い詰めた時の表現である。これとよく似た表現が『祖母の為に』の中にある。「凶」——こう云った見えない力がこの家中を一ぱいに支配している」というもので、これは不気味な夢の中で使われた表現だ。これ程独特な表現を二度も用いているのは、たぶんこの表現が作者にとって張り詰めた雰囲気を表すのにぴったりの表現で、非常に気に入っているからだと思う。

これと同じように、「何といつても自分には母だけだった」という言葉は作者が故意に謙作に言わせたものだろう。そして、この場面が何月頃に連載されたのかはわからないが、「母」を「祖母」に置き換えると前者は後者の過去形になる事から、恐らく祖母の死後あたりに連載されたのではないだろうかという想像まで働かせてしまうのだ。

自分を甘えさせてくれる存在を求めるきっかけとなった母が、実は祖母を表しているという事は、作者が『暗夜行路』を

通して祖母に代わる甘える対象を探している事の証拠となるだろう。

謙作の出生の秘密がほんの思い付きに過ぎなくても、それは作者がいずれ迎えなければならぬ甘える対象の祖母がいない状況を作り出した事になる。だが、散々祖母に我儘を言つて育つて来た作者が、祖母が元気に生きている内に誰にも甘えられない状況に置かれた主人公を書く事は、相当難しかったに違いない。

だから、志賀が『暗夜行路』を書く為には、やはり祖母の死期が迫る事が絶対条件だった筈だ。始めに少し触れたが、志賀が祖母の死を本当に恐れ始めたのは、『大津順吉』に書かれた出来事の直後に祖母が卒倒して以来だ。それでもその後も勝手をし続けたのは、「心配を掛けてる間はお祖母さんも死にきれないんだから、安心されるのが私には何より可憐なんです」(『祖母の為に』)という気持ちがあったからだ。それ程までに恐れた祖母の死が差し迫った時に、志賀が取った行動が父との和解であり、『暗夜行路』の執筆だったのではないだろうか。つまり、祖母を亡くした後の為の対策である。

だからこそ、作者は謙作が直子の姦通をきっかけに甘えさせる立場へと成長していくまでを書いたのだ。大山で過ごす事で謙作が求めたものは、こだわりから解き放たれ、それによって直子を本当に許す事である。ここで言う「許す」とは罪や罰を勘弁するという意味だけではなく、願いなどを聞き入れるという意味も含んでいるのだと思う。願いを聞き入れるという事は、甘えさせる事にも通じている筈だ。謙作にとって大山での生活

は、甘える立場から甘えさせる立場へと成長する為のものだったのだ。

しかし、わざわざ大山くんだりまで旅立たなくても謙作の心は甘えから許しへと向かっていたのだ。どこからそれがわかるかという、「貴方は馬鹿ですよ、少しも自分を知らないんだ。一本立ちでやって行こうなんて、柄でもない考を起こしたのが間違いの原ですよ」という言葉からである。この言葉は、一人尾道に行き、体も精神もヘトヘトになって帰ってきたときにお栄から言われた「痩せましたよ。もう、これから、そんな遠くへ一人で行くのはおやめですね」という言葉を、天津で商売に失敗し行く当てのなくなったお栄に謙作自身の言葉で言つたものだ。嘗ての謙作に、これ程温かみのある言葉が言えたのだろうか。これは明らかに、今度は自分が甘えさせてやりたいという気持ちから出た言葉だ。その後のお栄の世話をしたいと思つたのも一見当たり前のようだが、よく考えると謙作が誰かの世話をするのは初めての事なのだ。

直子との結婚や子供の誕生は、確実に甘えさせる立場へと謙作を導いていた。にもかかわらず、作者が直子の裏切りを齎したのには、何か大きな試練を与える事で甘えるだけの立場から卒業したという決定的な証拠を残す為なのだと思う。

大山での生活は、それまでただひたすら自分の内面だけで物事を解決して来た謙作に様々な変化を齎す。一番初めに現れたのは美術品の好みの変化である。土居健郎は日本人は全体として他国民に比し審美的であるというが、その中でも謙作は特に美にうるさいと言つてよい。審美的であるのは、甘えの感受性

が大きく物を言っているかららしい。謙作が審美的である事、そして更に美の追求へ走った理由については次の文章を引用したい。

「一般的に美というのは、対象の与える印象が感覚に快い場合であつて、その体験においては対象の美を享受する者が対象と一つになっている事であるが、これは甘えの体験と似通うところがある。というのは甘えは度々述べてきたように相手との一体感を求める事だからである。最もその場合、相手がこちらの意図を理解し、それを受け入れてくれる事が絶対必要である。しかしこの事はいつも可能という訳にはいかないから、甘えを求める者はいきおいフラストレーションを経験する事が多く、もし満足を感じる場合にも長続きしないのは通常である。この事から真の永続的一体感を求めて、ある人々は禅その他の宗教に走ると考えられるが、同じ動機が美の追求に赴かせる事もあるのではなからうか（中略）すなわち甘えの世界に生息して絶えず甘えの感受性を刺激されていると、否が応でも美を求めずにはいられなくなると考えられるのである」（『甘え』の構造

（新装版）

謙作の場合は宗教ではなく、美の追求に走ったと言える。ここで言う美とは、美術の事を指している。『暗夜行路』の中では、大山へ旅立つ前と後では美術品の好みが大分変化している。謙作は話の後半で、殆ど興味を持たなかった円山派の絵も見てみようという気になっている。これは大山へ向かう途中の事である。という事は、こだわりから解き放たれようという決心の一番強い時だと言える。この「こだわりから解き放たれよう」

「受け入れよう」という気持ちだが、直子を許すだけではなく、いろんな方面へ作用したのではないだろうか。その内の一つが美術品の好みの変化であり、今まで嫌いだった絵を見に行くという行動へ繋がったのだ。

次に変化を齎したのは、分けの茶屋の老人や屋根やの竹さんである。大山の大自然に溶け込んでいる老人に羨望を抱き、生来の淫婦である妻を持ちながら、その妻の性質とこれまでの悪い習慣を完全に知る事で自分の感情を没却し妻を許す竹さんの寛容さに衝撃を受ける。この二人の人物は、謙作の目指すべき理想像を明確にするのに大いに役立っているのである。そしてこの理想の実現を促したのが、大山の大自然なのだ。

大山の自然は、嘗て謙作が信じていた人間絶対主義を覆した。謙作は阿弥陀堂をよく訪れ動植物に親しんでいるが、根源的な自然に帰依、調和する態度を謙作に定着させるのに、阿弥陀堂での自然体験は重要な役割を果たしている。「子供から母を憶う時、よく一人、母の墓へ出かけたが、同じ気持ちで、其処（阿弥陀堂）へ来る事を彼は好んだ」という文章からわかるように、謙作は自然を母のようなもの、故郷のようなものと感じている。そして、根源的な自然に抱かれ人間よりも単純で、鮮明に生きる生き物達を一種の典範として仰ぐ姿が感じられる。嘗て謙作の心を支配していた人間絶対主義の様なものは影を潜め、科学の肯定から否定へ、自然との対立から調和へと物事の考え方が受け入れる方へと変わって行くのである。

受け入れる態勢が整って来た謙作が本当に永続的一体感を手に入れる事が出来たのは、大山登山の際に「なるがままに溶け

込んでいく快感だけが、何の不安もなく感ぜられるのであった」と感じた時である。謙作は大山を最後まで登りきらなかった。元来人間が山を登るのは、その山を極めた達成感を味わう為だと私は思っている。しかし、謙作は途中までしか登らなかつた。この事は、謙作の考え方を示している行為だという気がする。謙作は大自然との格闘を望んでいたのではなかつた。静かな自然への帰依を望んでいたのである。

自然への帰依と呼べそうなものはこの事以前にもあった。自分の出生の秘密を知った時の、暗くなつた気分を引き戻すための手段の事である。「彼は広い広い世界を思い浮かべた。地球、それから、星、宇宙、そう想い広めて行つて、更にその一原子程もない自身へ思い返す、すると今まで頭一杯に広がつていた暗い惨めな彼だけの世界が急に芥子粒程のものになる」というものの事だ。私は初めこの手段は自然への帰依だと捉えていた。だがよく考えると、この頃の謙作は自然を恐れていた時で決して自然に溶け込もうとはしていなく、大山登山の際に感じた「自然というのは芥子粒程に小さい彼を無限の大きさで包んでいる気体のような眼に感ぜられないものであるが、その中に溶けて行く」というのとでは同じ「芥子粒」と感じたのでも全く違う。前者は「手段」と呼んでいただけあつて、後者と比べるとわざと自分よりも明らかに大きな自然と比較する事で、自分の悩みが如何に小さなものであるかを自分自身に言い聞かせるために「芥子粒」と感じたに過ぎない。一方、後者は純粹に自然に比し自分が「芥子粒」だと感じているのだと気が付いた。謙作は自然に還元する事で、漸く真の永続的一体感を手に入れる。

る事が出来たのだ。

だからこそ、直子を許すという次の段階に進む事が出来たのだ。それが実現されるのが最後の直子を見つめる場面である。謙作の眼差の中に直子が認めたものは愛情であり、完全な許しである。そして、「謙作は黙つて、直子の顔を、眼で撫でまわすように只視ている。それは直子には、未だ嘗て何人にも見た事のない、柔らかな、愛情に満ちた眼差に思われた」と言う文章だが、この部分を読むと私はいつも『和解』の中の作者と父が駅のプラットホームで眼と眼で会話をした場面を思い出す。謙作の眼差が、父の眼に表れた表情と重なつて見えるのだ。

それから、「直子もまた、眼のすつかり落窪んだ、頬のこけた、顔色も青黄色くなつた、そして全体に一トまわり小さくなつたような謙作を見て胸が痛くなつた」という文章があるが、謙作の顔や姿が明らかになるのは実はこの場面が初めてなのだ。それまでは謙作から見た他人の顔や姿は克明に描かれていても、他人から見られた謙作の顔や姿は描かれてはいない。この事は、今までの謙作が如何に主観的で他の介入を許していなかつたかを表していると同時に、その状態から抜け出し、直子との真の和解を迎えた状態を表していると言える。

今後甘えられなくなる祖母を、甘えさせてくれない母で表し、母に代わつて自分を甘えさせてくれる女性を探し求める。そして、試練を与える事で甘えただけの立場から受け入れる立場へと成長させる。この事は、祖母が生きていては決して成し遂げられなかつた筈だ。それ程までに祖母の存在は大きいのである。

そしてこれまで余り重視して来なかったが、連載が始まるまでの十年の間に作者が結婚している事もある程度関連しているように思う。一般的にマザーコンプレックスなどの劣等感を抱えている人が、その状態から抜け出すにはその人に代わる人と出会わなければ難しいと思うからだ。志賀の場合、『和解』の中に描かれた妻に対する横暴振りからわかるように彼女との結婚で祖母に代わる人物と出会う事が出来た。恐らくこの結婚の前に祖母の死期が迫った所で、連載は始まらなかっただろう。

かといって、代わりさえ見つければコンプレックスの状態から抜け出せる訳でもないと思う。代わりが見つかった所で、その元がある限り完全に抜け出す事は出来ないのではないだろうか。だから、結婚後も連載が始まるまでに間があったのだろう。

つまり、『暗夜行路』を書き始めるには、作者が祖母に代わる誰かと出会う事、祖母の死期が迫る事の二つの条件が揃わなければならなかったのだ。しかし、作者は祖母の存在がこの作品に及ぼした影響について余り意識していないようにも思う。もしも、作者が甘えという観点からこの作品を書いたのであれば、先程欠点と指摘した新婚生活による甘えの充足を克明に書き表した上で、更なる試練を謙作に与えるだろうと思えるからだ。恐らく志賀は甘えの事など念頭に置いてはいない。それでも甘えという観点からこの作品を読む事が出来たのは、志賀にとって祖母に甘えて来た事は当たり前の事で、その状態から脱却する事も極自然な成り行きであり、それが無意識の内に作品

の上に現れたからだと思う。

志賀が『暗夜行路』を恋愛小説と評された事を、思いがけないながらも作品の幅として嬉しく思った様に、甘えからの脱却を描いた小説として捉えた私の考えも作品の幅として受け止めて貰えれば幸いである。

(きくい みわ・二〇〇二年卒業)